

まれた『記念誌』である為に「日本
 大学大阪専門学校」・「日本大学大阪
 中学校」に就いての同様な調査記録
 が収録されている。

(4)は縦約二十二・五センチ・横約
 十六センチで、二九一頁から成るも
 ので、扉に「近畿大学図書」のスタ
 ンプ・「近畿大学図書館図書」の角
 印と並んで「深澤 12.9.7 田中
 榎」のスタンプが押されており、奥
 付の裏面に「近畿大学図書」の
 「10.23」の精円形スタンプが押され
 ており、その中に「深澤1904」の書き
 込みがある。この(4)では(3)に挙げら

各地のアーカイヴズ紹介 9

― 追手門学院大学
 学院志研究室 ―

教職教育部教授

建学史料室研究員 富岡 勝

平成三十年三月五日、追手門学院
 大学の学院志研究室を聞き取り調査
 のために訪問し、学院志研究室的藤
 吉圭二室長、齊藤一誠副室長、安田
 純也氏、小倉久美子氏と將軍山会館
 の梅村修館長からお話を聞くことが
 できたので、その概要を紹介したい。
 調査は、本学建学史料室研究員の酒
 匂康裕、同室職員木村道子と報告者
 の三人が担当した。

周年行事にかかる年表作成

藤吉室長に挨拶したあと、学院

れているような統計数字に立脚し
 た叙述がなされているが、残念な事
 に「日本大学大阪専門学校」・「日本
 大学大阪中学校」に就いての記述は
 ない。「深澤 12.9.7 田中榎」の
 スタンプは、従来の調査では出てこ
 なかったスタンプであり、注目され
 る。一連の蔵書印から、本書が日本
 大学専門学校庶務から大阪理工科大
 学を経て「近畿大学蔵書」・「近畿大
 学図書館図書」となった事が分る。
 (近畿大学名誉教授

建学史料室研究員 荒木 康彦)

の一三〇周年(二〇一八年が創立
 一三〇年)の周年行事に係した年
 表整理に関わっている齊藤氏と安田
 氏から伺った。

齊藤氏は、最近の十年分の年表を
 作成したが、まとめる際に、「改革
 の十年」と呼ばれる近年の追手門学
 院大学の改革の取り組みに焦点を当
 てて編集するという方針をとったと
 いう。その際、改革の取り組みを掲
 載した『学院報リベルタス』(学校
 法人追手門学院総務室広報課発行)
 を活用することによって、詳しい内
 容を漏れなく集めることができるよ
 うに心掛けたということであった。

また、一三〇年間の年表データ
 ベースである「マザー年表」の作成
 に従事している安田氏からも作業内
 容についてお聞きした。これまで学
 院全体で刊行してきた十七種類の年
 史(学院全体・小学校・中学高等学

校・大学など)の年表をもとに、統
 一した基準を設けて事項を収録して
 いるとのことであった。さらに、デー
 タベースソフトを活用して、年表事
 項と各年史の本文とをデータ上でリ
 ンクさせる仕組みを構築する試みも
 おこなっているそうである。

年表に関するこうした取り組みは、
 現在の周年事業だけでなく、将来の
 年史編纂でも活用していくことを目
 的に実施しているとのことであった。
 正確で詳細な年表を作成していく
 ことは、現在の周年事業はもちろん、
 将来の年史編纂についても大いに役
 立つ重要な基礎作業であるといえる
 だろう。本学でも参考になりたい取
 組みであると思われた。

將軍山会館の見学

次に、同窓会館である將軍山会館

を見学し、梅村館長に解説してい
 だいた。

將軍山会館は、学院一二〇周年、
 大学四〇周年の記念事業として、同
 窓会の寄付によって建設された施設
 であるとのことである。地上二階地
 下一階で建築面積約三七九平方メー
 トル、延べ床面積約六八四平方メー
 トルの広さで、一階と二階には学院
 の歴史に関する展示室が四室、地下
 には会議室や収蔵庫があり、さらに
 オープンカフェ、ラウンジ、中庭な
 ども設けられている。一度に三十人
 程度の学生が同時にゆとりをもって
 見学できるとのことである。たしか
 にゆつたりとした空間であった。

追手門学院大学では、自校教育の
 授業が行われており、受講生は、こ
 の授業の初回とともに最終回の授業
 にも見学している。二度目の見学で



学院志研究室内での聞き取り調査の様子



將軍山会館外観



将軍山会館内の展示室風景

は、受講生は学院に関するクイズづくりに取り組むなど、より深い学びをしているとのことであった。

将軍山会館の基本的な管理は総務課が行い、教員である梅村館長を中心に、学生ボランティアの協力も得ながら案内をしているそうである。

二回にわたる見学やクイズづくりなど、自校教育に資料展示を積極的に活用している点が、とても興味深く感じられた。

自校教育用のDVD『追手門の歩み』(世紀をこえて)、自校教育用テキスト『追手門の歩みー世紀をこえて』(二〇一一年刊行)、『マンガ追手門の歩み』(二〇一二年刊行)などを、ご寄贈いただいた。本学で活用していきたい資料である。



記念資料室での聞き取り調査

記念資料室の見学

記念資料室は、学院の歩みを記した様々な史資料が整理・保存されている施設である。一九八三年の追手門学院大学二十周年を契機に設けられ、現在は学院志研究室に所属している。この記念資料室については、藤吉氏と小倉氏から伺った。

学院志研究室が設けられたのは二〇一二年であったので、記念資料室は当初は庶務課のなかに設けられたとのことである。

二〇一五年に定時職員の室員が記念資料室の専属として配置されてからは、学院の歴史史料のデータベース化作業や、『学院志研究室 News Letter』の編集などが実施されているとのことである。



記念資料室の書架

ることは、「卒業生に喜んでもらい、協力を得られるように」していくこととであり、例えば学院で撮影した古い八ミリフィルムを調査員の手でデジタル化し、その一部を大学祭のときに学内数カ所で放映すると同時に学院志研究室への資料寄贈の呼びかけをするといった取り組みもおこなっているとのことである。

業者に委託した写真アルバムのデジタル化事業では、写真内容の特定作業において、元教職員の調査員が活躍しているそうである。

記念資料室の目録作成と資料書架の整理は藤吉氏のアドバイスをもとに、小倉氏が中心になって実施している。小倉氏は、「利用しやすいように」を念頭に分類方法を見直し、目録と書架の資料配置が一致するよ

うに工夫し、図書館などで用いられる三段ラベルに分類・形状の記号を印字して配架資料に貼付しているそうである。

藤吉氏の談話

調査の最初と最後に藤吉氏の研究室で、学院志研究室や藤吉氏の研究について伺うことができた。

現在、学院志研究室は、大学附置(一貫連携教育部)の組織であり、室長一人(教務部長・社会学部教授)、副室長一人(学長補佐・国際教養学部教授)、室員三人(国際教養学部教授)、調査員四人(初等中等室教職員、元教職員など)、スタッフ二人(学院志研究室専属)から編成されている。学院創立一三〇年が近づいた二〇一六年に組織の拡充が行われて現在のようになったとのことである。

藤吉氏は社会学の研究者であるが、社会学研究の一環として「社会とアーカイブズとのかわり」に関する研究に取り組んでいる。こうした研究テーマに取り組むように至った経緯や、国際学会でアーカイブズに関するセッションを自ら企画して参加者を募集し、国際的な交流をつくりだす試みをしていることなども聞くことができた。

二〇一八年の学院創立一三〇年という節目に向かって充実が図られてきた追手門学院大学学院志研究室の事例は、将来をも見据えた年表作成、自校史と展示との連携、関係者の協

力を促進するような資料室、アーカイヴズに関する大学全体の期待など様々な点で、七年後に百周年を迎える本学にとって多くの示唆を与えていると思われた。

近畿大学を巡る史資料 10 ―『近大生活』―

経営学部教授

建学史料室研究員 稲葉 浩幸

本書の歴史に関する史資料として今回紹介するのは、昭和二十九（一九五四）年に発行された永井次勝編『近大生活』である。『近大生活』は現代思潮社の「大学生活シリーズ」のひとつとして出版され、当時の価格にして二百円で販売されていた。この「大学生活シリーズ」はほかに『東大生活』『慶大生活』『早大生活』など二十一冊が既刊となっていたが、『近大生活』以外はすべて関東地方の大学であった。（資料1参照）

当時、本学教授であった永井次勝は、本書の序文において、自身のことを「昭和十三年当時の大専教授となり、戦後しばらく退いていたが、昭和二十五年半ばから再び近大に入ったもので、近大では相当古い関係を持ち、近大の発展を目的のあたりに見て来た一人である」と述べている。『近大生活』の主な内容構成は次の通りである。

- 序文
- 第一篇 一、学園生活点描
二、大学界隈
三、近大の歴史的環境
四、近大正章と梅
- 第二篇 一、近大と世耕総長
二、学園の沿革
- 第三篇 一、主要幹部教職員プロフィール
- 第四篇 一、学園概況
二、研究機関
三、附属学校
四、附属設備
- 第五篇 一、外国留学生招聘制度
二、就職問題
三、校友会活動
四、自治会活動概況
五、茶心会
- 資料篇 一、近畿大学役職員一覧
二、近畿大学教授一覧
三、近畿大学学則（抄）
四、校歌、応援歌
- 口絵

本書の序文によれば、「この編纂の基本方針として、徒らに学園生活を美化修飾することを避け、赤裸々な面をさらけ出し、読者に近大の価値を批判して貰うことを企てた」としている。さらに、「大学生活の四年間は、永いようで短く、短いようで永い。若い人々が社会の実生活に入る前の四年間である。その学園は、学問という観念から印象づけられる気むずかしい雰囲気ばかりでなく、また学者というものの生活は、

融通の利かない、超社会的な或は偏執的な、もしくは孤高を楽しむような人ばかりでなく、それは一面において市井の生活におけるユーモレスクもあり、教授とは学問以外の生活においては庶民的生活を送るものにも過ぎないという面を多く描寫し、大学と社会のくさびとしたい」とあるように、当時の近畿大学について大学の概要だけに留まらず、大学生活から教職員のプロフィールに至るまで自己観察を交えながら様々な観点で紹介されている。

その一例として、「第四篇 四、附属設備」の中の「2 映画教室」を抜粋してみる。この「映画教室」について、永井は次のように説明している。



『近大生活』表紙

視学教育を主唱した世耕総長の創意による近大の映画教室は、設備の完備したものであるが、この映画教室は学問研究の上においても百聞は一見に如かずの見地から、教室における聴覚教育ばかりでなく、その学理を一つのスト

リに織り込んで視覚から教え、研究させるために用いられるのみならず、更に学生の情操教育の一端として、内外の名画を一週二回ずつ映寫している。更に土曜日の午後、日曜日は学外附近の人々に実費を以て公開しているが、近大映画として人気を博すにいたっている。これも大学と学外の人々との親しみをたもち、大学の社会活動の一つとして



資料1『近大生活』奥付の裏より